

「西アジア先土器新石器時代石器研究者連絡会」第4回大会

前田 修

4th Workshop on PPN Chipped Lithic Industries

Osamu MAEDA

このワークショップは、1993年にベルリンで開催された第1回大会以来、ワルシャワ、ベニスと開催地を変え数年おきに催されている西アジア考古学の石器研究ワークショップである。西アジアをフィールドとする各国の石器研究者の交流を促進させることを意図して立ち上げられたもので、第1回大会の概要が西秋良宏氏によって雑誌『オリエン』36巻1号に報告されている。また、過去の大会の研究発表はex oriente発行のシリーズ本である、Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environmentから、分厚い緑色のペーパーバックの論集となって出版されているのでご存じの方もおられるかもしれない。第4回目となる今大会は、トルコ共和国、ニーデ県の博物館に於いて2001年6月4日から8日まで、エクスカーション2日を含め計5日間に渡って開催された。12ヶ国より50人以上の参加があり、日本からは3名が参加してそれぞれ研究発表をおこなった。

ニーデ県はアナトリア高原の中央部、大小の奇怪な形の石灰岩が並ぶ風光明媚な観光地として名高いカッパドキア地方にある。この地方は黒曜石の産地としても有名であり、先史時代に西アジア各地で使用された黒曜石の2大産地のうちの1つとして知られている。開催地としてこの地が選ばれたのはそのためであり、この地で黒曜石原産地遺跡の調査を数年来続けているNur Balkan氏（イスタンブール大学）とDidier Binder氏（フランス、CNRS, Valbonne）の2人が今大会の主催者を務めた。テーマの一つに黒曜石研究のセッションが設けられたのが今大会の特徴であった。

各研究者の発表テーマは多岐に渡るが、大会は4つのセッションに区切られ順次研究発表がおこなわれた。各セッションのテーマは以下の通りである。

- 第1部 PPN Lithic Technology
- 第2部 Obsidian Production and Exchange from Late Epipaleolithic to Pottery Neolithic
- 第3部 Integrative Studies of PPN Technical Systems
- 第4部 PPN Lithic Cultural Markers: Spatial, Social and Symbolic

初日におこなわれた第1部は石器製作技術に関する研究

発表を中心におこなわれた。現在調査が継続している遺跡の資料を用いた発表が多く、速報性を備えた新鮮なものであった。特に、イスラエルでは近年発掘調査が急増しており、出版物のみでは新情報を入手しきれない状況になりつつあることに憂慮していた筆者にとっては、イスラエルの石器研究の現況を把握することは大変有意義なものであった。また、本セッションでは有村誠氏が北西シリアのテル・エル・ケルク遺跡で一括して出土した石刃の分析に関しての発表をおこなったほか、チャヨニュ遺跡の石器の再分析や、チャタルフユック遺跡の再発掘結果など、著名な遺跡の資料の再評価が注目を集めた。

3日目午前中の第2部では、黒曜石交易をテーマに掲げた発表がおこなわれた。西アジア先史時代に利用された黒曜石の原産地の大部分はアナトリアに限られており、メソポタミアやレヴァント方面では、原産地から離れるにしたがって各遺跡での黒曜石の利用状況が大きく変化する。本セッションでは、トルコ、シリア、イスラエルの各遺跡で出土した黒曜石石器について複数の研究者から発表が寄せられ、各地での黒曜石利用の相違を比較するうえで興味深いものとなった。また、前日のエクスカーションにおいて近隣の黒曜石原産地遺跡を訪れ、参加者全員が原産地遺跡における黒曜石の利用状況を実見していたことが、共通認識をもって本セッションの討議を進めるのに役立った。筆者も本セッションにおいてシリア、エル・ルージュ盆地の黒曜石利用に関する発表をおこなった。一方、発表を予定されていた西アジアの黒曜石石器研究の第一人者であるM.-C. Cauvin教授が都合により今大会に参加できなかったのはまことに残念であった。

同日午後からの第3部では、使用痕研究の発表が多くを占めた。日本では70、80年代以降下火になってしまった感のある使用痕研究であるが、フランス、スペイン、イタリアなどでは今なおこの分野の研究が盛んである。研究の細分化、専門化が進む一方、数十年前とは違い非常に緻密な実験研究がおこなわれ、使用痕同定のための基礎データが十分に蓄積されつつあるという印象を受けた。

4日目の第4部では分布論や、石器のシンボリックな側面に焦点を当てた発表が多くおこなわれた。第3部が石器そのものの読みとりに焦点があてられていたのに対し、本セッションでは、石器の解釈に主眼を据え考古学的文化を

読みとる試みがなされた。日本からは、西秋良宏氏による北シリアのセクル・アル・アヘイマル遺跡出土石器の分析についての発表もあった。この日の午前中までに計37の研究発表が終了し、午後からは総合討議に移った。討議の最後には次回第5回大会の開催地の選定があり、当初ヨルダンという案も出されたが、パレスチナの政情不安を憂慮し結局次大会はフランスで開かれることが決定され幕を閉じた。

大会中には、研究発表の合間を縫って2日目と最終日にエクスカッションが組まれた。参加者は2台のバスに分乗しての移動で、にぎやかな遠足気分であった。標高1500mを越える黒曜石原産地を訪れた際には、最後の道程を歩いて登らねばならずまさに遠足という感じであったが、背丈を超える高さでドーム状に広がる黒曜石の露頭は圧巻であった。また、開催地が山間の小さな町であったため、参加者が皆同じホテルに宿泊していたことはお互いの交流を深める良い機会となった。食事の席も自然と会話のはずむ心地良い談笑の時間であった。毎晩のように近くのディスコへ出かけるグループもあり、堅物なイメージのあるドイツの考古学者が一番に踊り出すのを見るのは意外であった。

今大会では発表テーマが石器研究全般におよんでいる一方で、現在進行中の発掘調査の資料を主とする発表も多く、研究者の間で最新の情報を交換し合えたことが大きな成果の一つであるといえる。また、小規模なワークショップである利点を生かして、意見交換の機会が非常に多く設けられていたのが今大会の特徴といえる。各発表後の質疑応答の他にも、各セッションの最後には十分な討議の時間もたれ、ゆとりを持って組まれたプログラムのおかげで討議の時間が足りなくなるということもなかった。石器研究のワークショップだけに討議の内容は多分に専門的ではあったのだが(例えば、ナヴィフォーム式石核とは何か?など)、きわめてアットホームな雰囲気の中で意見が交わされた。セッションごとのテーマを叩き台にはしても、必ずしもそのテーマに沿って問題点を深く掘り下げるといった方式はとらずに、各人の思うことを自由に発言し合うというかたちで会が進められたため、参加者がお互いの考えを十分に確認し合うことが可能であった。そうした考え方の違いに各国の研究者のお国柄が感じられるのも興味深かった。グ

ローバル化が進む現代とはいえども、各国研究者の研究姿勢には明らかな違いがみられる。例えば、フランス、スペイン、イタリアの研究者の多くが、石器の製作実験や使用痕研究など、物質的なレベルでより専門的な研究を徹底しようとする一方で、アメリカ、イスラエルの研究者の多くが、社会的な意味やコンテクストなど、より大きな視野を重視するといった具合である。このような研究方法の違いは単に方法論の違いに収まるものではなく、各国の研究者が考古学へ向き合う姿勢そのものの違いであるといえる。ひとことで言ってしまうえば現代の我々自身が属する文化の違いということになるのだろうが、こうした姿勢の違いを肌で感じることができるのが国際的な研究会に参加することの利点である。インターネットなどの発達にともない、日本に居ながら得ることのできる西アジア考古学関連の情報量は格段に増加してはいるものの、海外の研究者がどのようなスタンスで研究をしているのかを、直接会って話をするとなしに実感するのはやはり困難である。その意味で、小規模な参加人数で、休憩やエクスカッションの時間が十分に組み込まれた本大会は、他国の研究者と日常的にコミュニケーションを取る機会のない筆者にとっては理想的な場であったといえる。実際、今大会では大学院生の私でも著名な研究者と分け隔てなく接していただいた。宿舎到着後ロビーをうろついていた私に、先方から自己紹介をしてこられたのは高名な Bar-Yosef 教授であった。ホテルで働いているトルコ人のおじさんと勘違いした私は、いささか無礼な受け答えをしてしまったのだが。

国際的な研究会の目的は、何らかの結論やまとまった成果を求めることではなく、自由なコミュニケーションを進めることによって、他の研究者の考えが自分の考えとどれだけ違うのかを確認することこそあるといえる。国際的な研究交流の意義は単に考古学的方法論の輸出入にあるのではなく、各国の研究者の思考法の違いに遭遇し、それに驚く機会を持つことにある。普段日本にいれば当然の前提として鑑みることのない考古学へ対する姿勢そのものを、こうした場での驚きを通してもう一度捉え直すこと、この経験こそが考古学を研究するうえでの思考を活性化させる動因となるであろう。本大会開催の意義も、まさにこの点において評価することができる。

前田 修
筑波大学大学院生
Osamu MAEDA
University of Tsukuba